

## 知的障害のある人の語りによる自己認識の形成過程に関する一考察

杉田 穂子(青山学院女子短期大学・2873)

知的障害のある人の語り、作り出される知的障害、家族形態の変化

## 1. 研究目的

本研究は、「知的障害のある人は、家族・社会から、どのような取り扱いを受け、その経験をどのように受け止めてきたのか」を、知的障害のある人本人の人生の語りから学ぼうとするものである。

## 2. 研究の対象および方法

対象は、ある通過型入所施設を利用している人、あるいはしていた人で、面接協力への承諾が得られた17名である。了解を得た人の面接内容は録音し、逐語録に起こした。面接は職員の立ち会いなしで個別に行い、「小さい時の出来事」「学齢期の出来事」「学校教育を終了してからの出来事」「施設を利用した動機」「利用してから現在までの生活」「自分の障害」について、自由に話してもらった。面接は一人当たり30分から3時間を要した。

## 3. 倫理的配慮

面接は研究目的であることを事前に話し了解を得ている。本発表に際し、再び施設を通して本人の了解を得た。

## 4. 研究結果

17名のうち人生の語り聞き取れたのは16名であった。そのうち14名は、学齢期の勉強の難しさ・いじめによる特別支援学級・学校への移籍、一般就労した場合は職場での不適応・失職により福祉サービスを利用するに至っていた。しかし、2名だけは、小・中学校、共に普通学級に通い、その後普通高校に進学し、知的障害の自己認識がなかった。その語りを次に示す。

Aさん：40代、男性

小・中学校時代：いじめられてたから。中学校卒業するまで。小学校3年生ごろ[から]、

普通高校へ進学：楽しかった。(いじめられなかった?)うん。...[勉強は]難しかった。

...おれ、できなかった。...先生はいい人いたね。

高卒後、父と仕事：卒業してすぐ1カ月もしないうちに [親と同じ仕事] 始めた。おやじがやってた。親は、...いい就職とかね、ないから、それやったほうがいいんじゃないかかってことでやり始めました。2人で。20年間やってたの。18万もらってた。

父の死亡、家で閉じこもり：3年と半年家にいたから。おやじが亡くなった後、仕事してなかったの。だから[施設へ]入れられたんじゃない。

在宅から施設へ：(入る前は見学とかにきました?)来ない、いきなり来た。(お母さんはどう言っただの?)よかったねって、言った。すごく泣いたの。...今じゃもう。だからそう思えばいいんじゃないの。...近所の人、知らないと思いますよ。ここにいるの。

自分の障害について：おれ、何も持ってないもん。...普通のそこら辺の人とかとね、職員

と変わらないもん。

**Bさん：40代、女性**

普通高校へ進学：高校も楽しかったですよ、いろいろあって。…普通学級ですよ。

高卒後、家で家事手伝い：高校卒業してからは、…家で手伝いしてました。…母と料理したり…ずっと家にいましたね。[高卒後]20年ですね。…母と生活、暮らしていましたね。

母の突然の病気：…急に[母親が]倒れたんです。…びっくりしました。

在宅から施設へ：[入ったのは]家では一人で、無理だったからです。…父が、難しいからと言って、ここへ入れて入ったんです。…いつまでも父と暮らしたかったですね。(言いましたか?)はい。言いました。(お父さんは何て?)そしたらうん。笑ってました。

自分の障害について：自分では、ちょっと、障害を持っています。4度ですけど。…中学校も、いや高校の時は、思ってませんでした。このごろです。…父に言われたんですね。この人にも、言われましたよ。ええと、障害、知的がちょっとあるって言われました。…びっくりしました。…少し悲しくなりました。…今でも少し悲しいです。

## 5. 考 察

知的障害とは何だろう。対象者の多くは、学齢期の特別支援学級・学校への移籍、その後の職場での不適応・失職の経験により、社会から「他の人より～ができない自分」という自己認識をもたされ、福祉サービスを利用するに至っていた。しかし2名だけは、小学校も中学校も普通学級に在籍し、さらに普通高校に進学し卒業している。その後、社会と深く関わる事なく、家族の中でなんとか「仕事」をしながら、生活をしてきた。そのような平穏な日々から一転、家族成員の死亡や入院という家族形態の変化で、30代後半から40代になって初めて「愛の手帳」を取得させられ、通過型施設入所という形で福祉サービスを利用させられている。周囲の人たちは本人の知的障害についてなんらかの認識をもっていたのかもしれない。しかし本人たちは、知的障害についての自己認識がなかった。自分の障害について、Aさんは、「おれ、何ももってないもん。…職員と変わらないもん」と語り、Bさんも親から説明をうけるが、「びっくりしました。…少し悲しくなりました」と語っている。

知的障害は、障害が目に見えたり、症状があるわけではない。つまり自分では「認識しづらい」障害である。2名の語りは、自分には何の変化もないにもかかわらず、40代で福祉サービスを利用させられるに至る現実があること、つまり、本人たちにとっては、家族形態の変化によって「作り出される知的障害」があるという現実を教えてくれている。

今後このような自己認識の形成過程をたどった事例に対してそのことをも考慮した関わりが検討されなければならないだろう。

なお、本研究は、平成22年度科学研究費補助金/基盤研究(C)/22530661「知的障害のある人の語りによる自己認識の形成過程に関する研究」によるものである。